

第2節 考 察

Ⅰ．弥生時代後期後半の土器に現れた地域差について

今回の尾崎遺跡の調査で、24号住から弥生時代後期後半の住居に伴う一括資料を得たのをはじめとして、住居に伴うと思われる弥生時代後期後半の土器を比較的多く得た。美濃では、この時期の良好な資料がなかったため、土器の様相が知られておらず、尾張と共に濃尾として一括されることが多かったが、尾崎遺跡24号住の土器は、必ずしも尾張と一括できる内容ではない。そこで本稿では、今回得た資料を、土器の実態が明らかになっている尾張低地部とおもに器種、形式構成に着目して比較し、異同を確認し、その背景について考えてみようと思う。なお、形式ごとに設定される型式も比較の対象としなければならないが、今回は行わない。

1、前提

尾崎遺跡24号住の土器を弥生時代後期後半のものであると述べたが、赤塚次郎氏の編年〔赤塚1990〕に従うならば廻間Ⅰ式の後半にあたり、古墳時代の土器、すなわち土師器ということになる。しかし、本稿では弥生土器と土師器の境界を、全国的な土器の交流や小型精製器種の有無におこうと言う加納俊介氏の提言〔加納1986〕〔加納1991〕に従い、加納氏の編年による瑞穂期及び能田旭期を弥生時代後期後半と表現する。その中でも、本稿で取上げるのは専ら能田旭期である。また、能田旭期は高杯の形態変化などから更に細分ができるが、本稿では相対的な新古には言及するけれども、細分した小期を設定することは行わない。

また、比較する基準となる尾張低地部の土器については、すでに赤塚次郎〔赤塚1990〕、加納俊介〔加納1991〕、宮腰健司〔宮腰1993〕をはじめとする諸氏の業績があり、かなりの程度土器の実態が判明している。器種、形式構成を中心に予め整理しておくことにする。これまでの成果によると、甕はく字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕、S字状口縁台付甕からなり、その中でどの形式が主体となるかは遺構毎に違うが、三者は多くの場合伴出する。S字状口縁台付甕は、能田旭期にはじめて出現する甕の形式である。壺では、いわゆる鋸歯文パレス壺と、単純口縁のものがある。パレス壺は、拡張した口縁に擬凹線文を持ち、口縁は平坦或いは内湾した文様帯を持つ。文様としては、基本的に鋸歯文が採用されている。高杯は、有稜高杯と碗状杯部の高杯があるが、数量的には前者が多く、廻間遺跡S B 3〔愛知県埋文センター1990〕を見ると、住居で用いられたのは圧倒的に前者である。また、有稜高杯では杯部口縁部内面に多条の沈線を施したものや、分量がやや小さく、低脚なものがある。直口壺は、長頸のもの、細頸のもの、短頸の狭義の瓢壺がある。そのほかの器種としては、器台があり、これは通有の

大きさのものの他に法量の小さなものが存在する。¹⁾

2、尾崎遺跡と木曽川中流域の土器の検討

さて、前項で整理した尾張低地部の資料と今回得た尾崎遺跡の資料及び近隣遺跡の土器を比較してみよう。尾崎遺跡で検討の対象になり得るのは、8・22・24号住であり、相対的な序列としてはほぼこの順序となろう。

尾崎遺跡での事例について詳細は第IV章に譲り、尾張低地部との比較検討の結果本稿で問題となる点だけを述べる。

a 甕についてはくの字状口縁台付甕を主体としている。特に、24号住の一括資料では、出土した甕の多くがプロポーション等にはばらつきを見せながらも、くの字に外反する口縁を持ち、体部外面を粗い条痕的な調整を施し、下半にケズリ、内面もケズリという調整方法を共有している事が特筆される。受け口状口縁台付甕はない。ただ、24号住の場合、時間的に受け口状口縁台付甕は見られない可能性も考えねばならないが、8・22号住からも受け口状口縁台付甕は出土していない。S字状口縁台付甕はまったく出土していない。

b 高杯は、有稜高杯が多く出土しているが、碗状杯部の高杯は明確な資料がない。但し、法量がやや小さく、外反する脚部は数点出土しており、碗状杯部の高杯も実際には存在したと思われる。有稜の高杯は、24号住から4個体ほど出土している。形態のばらつきが大きい、口縁部に明確な内傾面を持たないのが特徴と言えよう。そのほか、同じく有稜高杯ではあるが、法量が小さいものがあることに注意したい。

c 直口壺は、長頸の直口壺と細頸の直口壺がある。

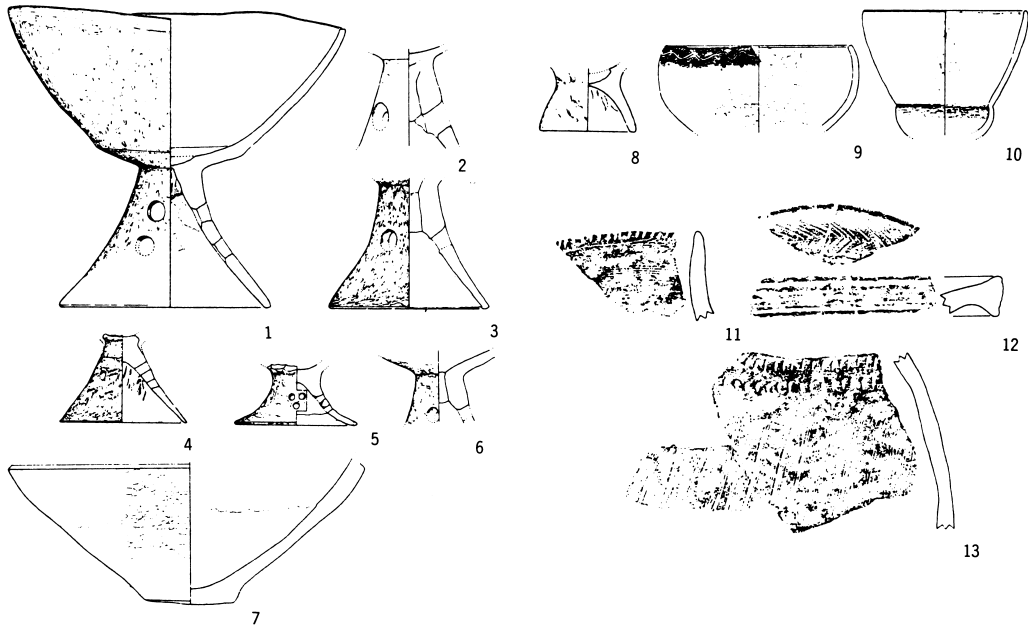
d 壺については資料がない。

e 器台は、通有の法量のもので小型品は存在しない。また、尾張低地部などで見られる口縁を拡張し、擬凹線文を施すものも存在しない。

f 22・24号住では鉢と分類した、法量が小さく、単純に外反する口縁を持つ煮沸に用いたであろう土器がある。一方、口径が大きく、浅い器形の鉢は存在するがあまり目立たない。

以上が、尾崎遺跡の土器について尾張低地部と比較した時に注意される点である。尾崎遺跡の資料の具体相には尾崎遺跡を残した小集団の固有の事情が反映しているわけで、それを検討することが重要であることはいうまでもないが、本稿では遺跡単位の事情はある程度捨象して、地域の問題として把握しようという立場にたって、近隣の遺跡に目を転じる。

美濃加茂市内の遺跡では、同じく弥生時代後期後半に属する住居址が検出されている今遺跡〔岐阜県教委・美濃加茂市教委1979〕をみておく。²⁾今遺跡の7号住居址出土の遺物(第75図)は尾崎遺跡の8号住に近い時期が想定できるものである。先に示した尾崎遺跡の注意項目に従ってしてみると、aは甕の出土がほとんどないため知り得ない。bについては、4が碗状の



第75図 今遺跡7号住居出土遺物

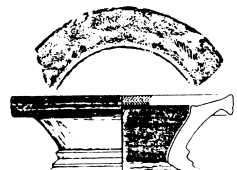
杯部をもつ高杯になると思われる。また、5は脚部のみだがあまり類例のない器形であり、4のような椀状の杯部の高杯とは別形式と考えたほうがよいと思われるが、今後の資料の増加を待ちたい。有稜高杯では口縁部に明瞭な内傾面は持たない。

cでは、長頸の直口壺と思われるものが2号住居址から出土している。

dでは、今遺跡の7号住居址で、いわゆるパレス壺(11)が出土していることが挙げられる。今遺跡出土のパレス壺は、全体が知り得るものがないため、体部の文様構成はわからないが、口縁形態は、浅井和宏氏の分類〔浅井1986〕によるC類(新)である。パレス壺が住居で用いられていたものと考えてよいだろう。また、10は台付の器形となるものと考えられ、尾張では能田旭期よりは瑞穂期に類例が求められよう。

そのほか、美濃加茂市内では採集資料ではあるが長福遺跡〔美濃加茂市1980〕の有稜高杯があるが、これも口縁に内傾面を持たない。

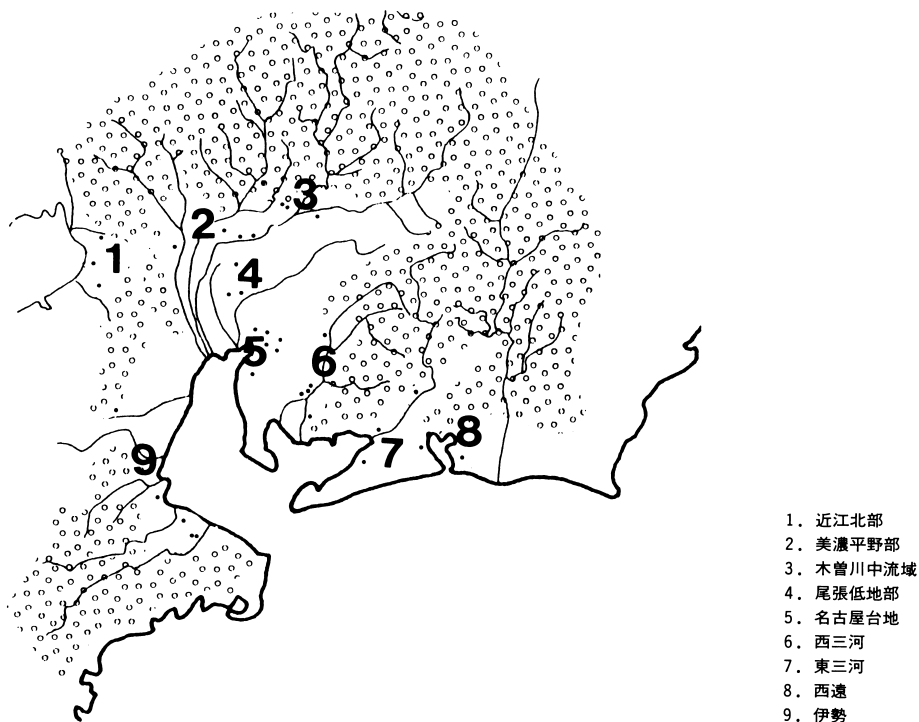
美濃加茂市とは木曽川を挟んで対岸に位置する可児市宮之脇遺跡〔岐阜県教委・可児町教委1976〕でも有稜高杯の出土があるが、これも口縁部に内傾面を持たない³⁾



第76図 今遺跡31号住居出土パレス壺

さて、以上のように木曽川中流域の遺跡出土資料を見てきたが、先述したように遺跡固有の事情を捨象して、ここで得た知見を木曽川中流域の特徴として理解しておきたい。

木曽川中流域に見られる土器の特徴を整理しておく。まず甕に関してはS字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕がほとんど見られない。尾崎遺跡24号住では甕は、くの字状口縁台付甕一形式から構成されており、多様な形式構成を見せる尾張低地部とは対照的である。高杯では有稜高杯が数量的に見て主体となり、これらは口縁部に明確な内傾面を形成しない。更に、法量がやや小さいものもある。椀状の杯部を持つ高杯も数量的には僅かであるが存在する。また、今遺跡7号住居址5は別形式の高杯の存在を示唆するものかもしれない。高杯の形式構成としては、尾張低地部に比較的近いと見てよいだろう。壺では、いわゆるパレス壺が採用されている。文様構成は不明であるが、口縁部で見る限り尾張低地部との類似度は低くない。直口壺では、長頸及び細頸のものがある。その他では、器台、台付埴なども採用されていたことが確認できた。木曽川中流域で用いられた土器は、高杯、パレス壺、器台、台付埴など多くが尾張低地部と共通である。一方で、甕の形式構成、法量の小さな器台、浅い器形の鉢の存否など一部



第77図 地域設定図

表44 各地域における一括資料の序列

	美濃	尾張低地部	名古屋台地	伊勢	西三河	東三河
瑞穂期						
能田旭期	尾崎SB8 今SB7 江東尾崎SB22 尾崎SB24	能田旭溝廻間SB75 廻間SB3	高蔵D—1 城遺跡溝 竪三蔵通5次	中楽山SB1 野垣内SB45 地蔵僧SB26	高橋32号住 中狭間溝	欠山遺跡 柳原諏訪SB110
廻間期						

(注) 各地域内での相対的な序列であり、地域間の厳密な併行関係は示していない。
なお、この表作成に当っては、〔赤塚1990〕〔加納1991〕〔久野1991〕等を参考にさせて頂いた。

に相違を見せる。

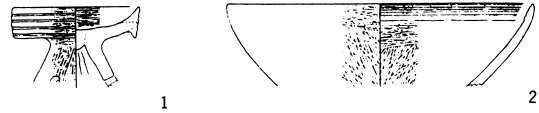
こうした相違が、何を背景として生じるかは、違いの現われ方を木曾川中流域以外の地域と比較してみないと解らない。と言うのは、尾張低地部はこの時代、この地域の中心地であって、単純に比較の対象とするには特殊に過ぎる可能性があるからである。しかし、同時に、多くの器種・形式の発祥の地である尾張低地部を介在させないでその周辺地域同士比較するのでは、比較の基準がないためにその地域の特徴が明瞭にならない。それ故、以下の検討は尾張低地部を基準としたときの各地域の「偏差」〔石黒1988〕の実態をまず確認し、その現われ方を比較することになる。⁴⁾なお、周辺地域の区分は第77図のように行い、それぞれの地域での主な一括資料の序列を表(44)に示す。

3、周辺他地域の検討

まず最初に、木曾川中流域と同じく美濃に属し、尾張低地部と近接する美濃平野部を検討したいが、資料の不足のため正しく把握することができない。それでも敢えて述べるならば、江東遺跡〔岐阜市教委1979〕、井八島水没遺跡〔川島町1976〕、藤掛中州水没遺跡〔笠松町文化財審議会他1976〕等から、S字状口縁台付甕A類〔赤塚1990〕が比較的多く出土していること、高杯の杯部内面に多条沈線を施すもの、口縁部を拡張して擬凹線文を施す器台などの存在から尾張低地部と極めて近い土器様相を示すと思われ、従来濃尾と一括されてきたこともうなずけ

るのである。

美濃平野部と同様に尾張低地部に隣接する名古屋台地は、尾張低地部からの偏差を持つ地域としてすでに度々指摘されている。宮腰健司氏によると〔宮腰1993〕、名古屋台地の当該期の土器を尾張低地部



第78図 堅三蔵通遺跡出土遺物

と比較すると、1、S字状口縁台付甕が格段に少ないこと。2、長脚の有稜高杯が弥生時代後期後半の内の新しい時期まで残ってくること等が特徴として指摘できるという。名古屋台地では、この時期の土器の量は豊富であるが、出土状況が良好な資料があまりないため、断片的な資料をつなぎあわせる事になるが、本稿の最初に尾崎遺跡の検討で挙げた点についてみていく。

a 甕については、宮腰氏の指摘にあるようにS字状口縁台付甕は極めて少ない。高蔵遺跡〔伊藤他1979〕〔伊藤他1985〕、見晴台遺跡〔名古屋市教委1966〕⁵⁾、城遺跡〔名古屋市教委1991〕など、能田旭期に属する土器を多く出土する遺跡においてもほとんど目立たない。城遺跡では大溝から多くの土器が出土しているが、甕はくの字状口縁台付甕を主体とし、受け口状口縁台付甕も含まれている。また、見晴台遺跡においてもその傾向は同じで、主体はくの字状口縁台付甕で受け口状口縁台付甕も見られる。両遺跡ともS字状口縁台付甕はほとんど目につかない。

b 高杯は有稜口縁のものが量的に多いが、椀状の杯部を持つものも存在する。有稜高杯は、杯部口縁に内傾する面を持つものが多い。脚の長さは個体差が大きい。また、口縁内面を肥厚させそこに多条沈線を施すものが堅三蔵通遺跡〔名古屋市教委1987〕で出土している（第78図2）。名古屋台地域ではこれだけである。その他、法量がやや小さく、外反する脚をもつものが高蔵遺跡で見られる。

c 直口壺では、城遺跡で細頸、長頸のもの、短頸の狭義の瓢壺が見られる。瓢壺には、貝殻の腹縁による連弧文が施されている。

d 壺においては、パレス壺が採用されている。口縁形態、文様構成からみても、尾張低地部のそれに極めて類似する。

e 器台については、通有の法量のもの、法量が小さいものもある。堅三蔵通遺跡においては口縁部を拡張し、擬凹線文を施すものが存在する。（第78図1）

f 鉢は、口径の大きな浅い器形のもの、深い器形のものが何れも見られる。

さて、名古屋台地の資料について概略ではあるが見てきたが、堅三蔵通遺跡において高杯、器台など尾張低地部との共通な土器がみられるが、これらの土器はそれ以外の名古屋台地上の遺跡では認められない。S字状口縁台付甕についてはこの時期には名古屋台地ではほぼ採用されなかったと結論できるだろう。この二点が、名古屋台地の偏差の実態であると見られるが、これは偏差の実態としては木曽川中流域に近いと見てよい。ただ、名古屋台地では受け口状口

縁台付甕、浅い器形の鉢が比較的多く見られることが相違している。

尾張低地部を基準とした時に、木曽川中流域、名古屋台地で共に欠落する土器形式として、S字状口縁台付甕、多条沈線を施した高杯、擬凹線文をもつ器台があり、両者の尾張低地部からの偏差は比較的類似している様に見える。では、尾張低地部の周辺各地では同じ様な偏差が現われるのであろうか。次に見る伊勢では偏差の実態がまったく異なっている。伊勢と尾張低地部の相違についてもすでに宮腰健司氏が指摘しているが、伊勢ではパレス壺が極めて少ないことが挙げられている。地藏僧遺跡〔亀山市教委1978〕、納所遺跡〔三重県教委1980〕、野垣内遺跡〔三重県教委1978〕、中樂山遺跡〔三重県教委1978〕⁹⁾などで良好な資料がありこれを見ると、確かに宮腰氏の指摘の通り、パレス壺は極めて少ない。伊勢でみられる壺は、単純に外反する口縁のもので、口縁部外面も、擬凹線文を施すことはほとんどなく、矢羽根状の沈線で飾られている。一方で、S字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕は数量的にも多く、住居単位で見ても、くの字状口縁台付甕とともに確実に組成に含まれている。尾張低地部との比較でまとめると、S字状口縁台付甕の採用は共通し、パレス壺が少ないことが尾張低地部との相違であると言えるだろう。偏差の実態としては、名古屋台地などとは異なっている。

その他の地域ではどうだろうか。西三河については、高橋遺跡4次S B32から良好な一括資料〔豊田市教委1969〕が出土しているが、ほぼ全ての甕がくの字状口縁台付甕である。S字状口縁台付甕は中狭間遺跡の濠状遺構などから数点の出土があるが比率の上でも決して高くない。壺では、高橋遺跡4次S B32で口縁部の形態から見てパレス壺と分類してよい壺が出土している。但し、文様は鋸歯文を持たないようである。パレス壺はそのほか、本神遺跡、中狭間遺跡の濠状遺構からも出土しており、絶対数の少なさは否定できないものの、住居からも出土していることから、土器形式として採用されなかったわけではないと考える。高杯、直口壺などは尾張低地部に共通する。また、中狭間遺跡では、法量が小さな高杯があり、鋸歯文、直線文で飾られている。S字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕の欠落が偏差の実態と見られる。

東三河では、諏訪遺跡、柳原遺跡、欠山遺跡の資料があるが、高杯、直口壺などに尾張低地部と同一形式の土器が見られるのは他地域と同様である。パレス壺、S字状口縁台付甕といった尾張低地部から広がった土器はほとんどない。だが、欠山遺跡では、くの字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕が見られるが、受け口状口縁台付甕の存在が目立つことが注意される。この受け口状口縁台付甕は、能田旭期の内に、尾張との関わりでもたらされたものであるという。〔鈴木1994〕同じく甕でありながら、S字状口縁台付甕はもたらされず、受け口状口縁台付甕はもたらされると言う現象に注意したい。

東三河の土器の様子を、尾張低地部との比較でまとめると、受け口状口縁台付甕、高杯、直口壺等が共通する一方で、S字状口縁台付甕、パレス壺などはほとんど欠落していると言ってよいだろう。

さて、鈴木敏則氏は今検討した諸地域に西遠を加えて欠山式を設定した〔鈴木1985〕が、西遠地域は今検討した地域と高杯、直口壺を共有〔鈴木1985〕するが、そのほかではほとんど別形式の土器が用いられている。⁷⁾

4、整理

さて、木曽川中流域の土器が尾張低地部の土器と具体的に何が相違し、その相違の仕方は周辺他地域と比べてどうなのかという問題からはじめて、周辺地域の尾張低地部からの「偏差」の実態を概観した。それをまとめると、周辺諸地域では資料が不足ぎみの美濃平野部を除いて尾張低地部とまったく同じ器種構成、形式構成を持つ地域は存在しない。何れの地域も何等かの土器形式を共有する一方で、何等かの土器形式を欠落している。そして、その欠落する土器形式は地域によって異なっている。単純化すれば、S字状口縁台付甕が採用されたのは尾張低地部の他では伊勢のみ、パレス壺は尾張低地部に近接する地域を中心で比較的多く採用されているが、伊勢では欠落する。また、受け口状口縁台付甕は尾張低地部と伊勢、名古屋台地、東三河の欠山遺跡など比較的広い範囲で採用されている。その他では、有稜高杯、長頸の直口壺などは伊勢から西遠という広い分布範囲を持つ。しかし、有稜高杯の中でも、杯部に多条の沈線を施したものは、美濃平野、尾張低地部、名古屋台地のごく一部と、上の検討では触れられなかったが近江の北部・東部等に限られる。同じく、法量の小さいものもほぼ同様の分布範囲であると見てよいが、尾崎遺跡や名古屋台地の高蔵遺跡、西三河の中狭間遺跡で見られる等やや分布範囲が広そうである。

今までは、各地域で尾張低地部と共通の土器形式の採用の有無をそれぞれの地域ごとの偏差として考えてきたが、土器形式について見ればその分布範囲が土器形式個々に異なっているということである。そこに着目して、偏差が生じる背景を考えてみよう。全てについてふれることはできないので、有稜高杯、パレス壺、甕などについて見ておく。

先に検討した中でもっとも広い分布域を持つのは有稜高杯であった。弥生時代、古墳時代の高杯を検討した比田井克仁氏は、盛り器としての高杯は甕、壺よりは消耗度が低く、量産を必要としなかった事から、型式変化の時間幅が広く、その為に同一形式の高杯の分布圏が他の器種の分布圏に較べて広くなることを述べているが〔比田井1983、1985〕、それがまさに有稜高杯の分布範囲の広さの理由であろう。口縁部の形態や脚部施文の有無などに地域的な差異を見せながらも同一形式と見てよい有稜高杯が広がる伊勢から西遠の範囲は、この高杯の共有に積極的な意味を見出していた纏まりというよりは、有稜高杯についての情報が広がり得た最大範囲とみるのが妥当であると思われる。そうした有稜高杯のなかで、分布範囲が異なるのが杯部の口縁部を肥厚させ多条の沈線を施すものである。先に述べた美濃平野部、尾張低地部、名古屋台地のごく一部のほかでは、近江北部など〔滋賀県教委・滋賀県文化財保護協会1989〕に限

られている。この高杯が他地域には広がらず、近江から濃尾を中心とする限られた地域のみで見られることは、同様な形態の高杯であっても、広範囲に広がり得る属性と広がり得ない属性があることを示す。杯部多条沈線有稜高杯がその他の有稜高杯とどのような関係にあったかを知り得ない現状では、この高杯がなぜ他の有稜高杯のように各地に広がらなかったかを知ることにはできないが、有稜高杯に関して、伊勢、近江から西遠という地域的纏まりの内部は全てが均質に情報を共有しているわけではないことを確認しておきたい。同様なことは、有稜高杯のなかでも法量の小さいものにもあてはまる。⁸⁾

次にパレス壺について考えてみよう。先に見たとおり、この土器は尾張低地部を中心に美濃の周辺部や名古屋台地、西三河でも採用されていた。また、近江北部、東部でもやや変化は大きい、パレス壺を受容したことを示す資料が多い。パレス壺は、稲粳或いは液体物などを貯蔵する機能を果たす美しく飾られた土器である。パレス壺が担っていたであろう意味の具体的内容⁹⁾には踏込む用意がないが、パレス壺が、生活の基盤である農耕と直接関わる土器であることと、その担っている意味を積極的に表現している点で、他の土器形式を共有することとはまた異なった意義があったと考える。ただ、パレス壺に記された文様は各地域で幾らか相違を見せており、器形赤彩といったものの共有の一方で、文様に表現された各地域の固有性も無視できない。¹⁰⁾こうしたパレス壺を共有する空間、すなわち近江北部から尾張低地部、名古屋台地、西三河という範囲は、単に土器形式についての情報を共有している範囲としてだけではなく、パレス壺が象徴する意味を共有し、そのことを積極的に示す纏まりとして理解する必要がある。¹¹⁾

次にS字状口縁台付甕は、その後の盛行や他地域への拡散、全国的な薄甕の出現と軌を一にするなど極めて重要ではあるが、その出現直後には尾張低地部と伊勢等の一部地域のみで用いられていたのみで、美濃の周辺部や名古屋台地といった近接する周辺諸地域で日常用いられる土器としては広がらなかったことを確認した。この時代における拡散の度合い、各地域の側で言えば採用の度合いはパレス壺よりも低い。¹²⁾もっとも破損しやすく、比較的短いサイクルで生産が行われる甕がそれほど拡散しないのは、尾張低地部から周辺に広がり、各地で受容されるだけの意味を持ち得なかったからであろうか。或いは、赤塚次郎氏が指摘するように〔赤塚1990〕、甕は日常的な土器であるからこそ「伝統的な甕に対する愛着」「新しい文物に対する嫌悪感」から各地域で採用されなかったのかもしれない。しかし、同じ甕であっても受け口状口縁台付甕は、名古屋台地にも多く見られるし、東三河の欠山遺跡でも比較的多く見られる。生産の場面で考えれば同じく赤塚氏が指摘するように、S字状口縁台付甕は製作技術の点で特異な土器であるから受け口状口縁台付甕等の他の甕と同様な伝播の仕方では広がり得なかったというのは十分考えられる。それに対して、受け口状口縁台付甕は、製作技術の点での特異がないため、両者の広がりかたに相違があるのだろう。¹³⁾しかし、そうしたS字状口縁台付甕が、

パレス壺を共有しない伊勢で採用されているのは注目される。これについては、現時点でその理由はわからない。

5、まとめ

以上まで、各地域で偏差が生じる背景、言い換えれば土器形式の分布範囲が相違する背景を考えてきたが、ここで最初に問題とした尾崎遺跡を含む木曽川中流域の尾張低地部からの偏差の背景を考えてみよう。

まず、パレス壺を共有することから、木曽川中流域は基本的に尾張低地部と共通の農耕に対する意識をもった地域であると言える。S字状口縁台付甕は名古屋台地など尾張低地部に隣接する地域でもほとんど見られない土器であったため、これを欠くからといって尾張低地部との「関係」が疎遠であったと考える必要はない。ただ、S字状口縁台付甕の製作に必要な技術の伝播がなかったことを確認できるのみであるが¹⁴⁾、むしろ、比較的周辺地域に拡散している受け口状口縁台付甕があまり見られないことを重視すべきである。前節で、受け口状口縁台付甕はS字状口縁台付甕とは違って、生産に特異な技術が必要とされたわけではなく、日常レベルでの土器形式の拡散、伝播を示していることを想定した。この欠落から、尾張低地部と日常的かつ頻繁な接触・交流はやや考えにくいということになる。S字状口縁台付甕、受け口状口縁台付甕の欠落は同時に甕の形式構成の単純さとして表れる。その点で、名古屋台地は木曽川中流域と比較的よく似た偏差の実態でありながらも、受け口状口縁台付甕を含むことからやはり尾張低地部との関わりかたが両者で異なっていると考えられるのである。高杯に関しては、有稜高杯が存在するのは当然であるが、その中で杯部に多条の沈線を施したものはなく、杯部の法量が小さいものは存在する。この両者は共に近江北部から濃尾平野を分布の中心としているものであるが、両者が反映している背景が異なるのか、或いは前者の不在が偶然であるのか現状では決め難い。ただ、かりに偶然の不在であったとしても美濃平野部などと比べて、前者が極めて少数であったことは疑いない。両者の持つ意味の違いが木曽川中流域での分布の有無になって表れていると考えたい。

以上のことから、尾崎遺跡を含む木曽川中流域の尾張低地部からの偏差の背景をまとめると木曽川中流域は、尾張低地部と同一であることを志向し、現実と同じ土器形式を採用しているものがある。特に、パレス壺に象徴される意味を共有していることは重要である。しかし、その一方で日常的、恒常的な接触、交流と言った土器についての情報が広がる具体的な機会が多くないために、本稿の最初に示したこの地域独自の特徴を発揮するにいたったと言えるのではないだろうか。なお、本稿では検討できなかった器種もあるため、木曽川中流域と尾張低地部の関わりかたが今述べたことで尽くされるわけではない。

6、おわりに

これまで述べてきた、各地域における土器形式の分布の有無は、各地域毎に見ると尾張低地部とは土器の組合わせに相違を持つことになるから、それぞれの地域での組合わせを、尾張低地部と同一大様式のなかの地域差としての小様式とするか、あるいは別の大別様式とするのかという議論が行われてきた。[鈴木1985] [赤塚1990] [加納1991] しかし、本稿では土器の組合わせを議論するのではなく、個々の土器形式の分布について考えてみた。具体的に見てきたように組合わせを構成する土器形式どうしの関連（例えばS字状口縁台付甕とパレス壺の関連）よりもそれぞれの独自性のほうがきわだっており、尾張低地部からの偏差という視点で見た時、各地での組合わせはあくまでも個々の土器形式の分布の結果であって、個々の土器形式の分布にこそ、我々が土器から復元しようとする地域間、特に尾張低地部を中心とした時の「関係」なり「影響」なりが具現化していると考えたからである。¹⁵⁾

また、それぞれ土器形式毎に分布域が相違するということ自体に検討すべき理由、背景があると考え。というのは、上で検討した土器形式の発祥地、中心地は何れも尾張低地部であろう事が推定されるのであるが、今示した分布の相違は、その周辺地域への拡散、伝播にあたって必ずしも全ての情報が広がったわけではない。また、受け手の側でも全てを受容したのではなく、選択が為されたことが推定されるが、そこにそれぞれの土器形式の他の土器形式に対する固有性を読み取ること可能であると考えからである。

本稿で見てきた事実は、個々の土器形式はそれ固有の機能があり、生産から使用に至るまでの固有の特質を持つこと、そして更には固有の意味を担っていたことを示している。土器形式についての情報の広がりかた、その背景はその土器形式の固有性を考慮しないと見えてこない。本稿では、その一部にしか触れられなかったが、そうした土器形式の固有性を捨象して組合わせの議論をするのではなく、固有性を確認した上で、その組合わせを議論しなければならない。

なお、本稿を成すにあたって、尾崎遺跡の土器については宮腰健司氏から頂いた御教示を、東三河の土器（欠山遺跡）については欠山式土器研究会における鈴木徹氏、赤塚次郎氏、加納俊介氏をはじめとする諸氏の議論を参考にさせて頂いた。

また、図版は、個々に示した文献から引用させて頂いた。

（注1）基準資料を出土した能田旭遺跡の溝状遺構〔師勝町教委1987〕については、その性格が不明なため、器種構成を考える上では注意しなければならない。なお、能田旭遺跡の資料については、市橋芳則氏の御配慮により実見することができた。

（注2）今遺跡の資料については、可児光生氏の御配慮により実見することができた。

（注3）宮之脇遺跡の資料については、吉田正人氏の御配慮により実見することができた。

(注4) この時期の土器の地域差を検討する作業は、[鈴木1985] [石黒1988] [宮腰1993]等で繰り返し行われており、本稿でもそれを参考にした。ただ、単なる存否だけではなく、住居での採用の有無やその組成上の位置等に着目したため、結論が違っている場合がある。

(注5) 見晴台遺跡ではすでに32次に及ぶ調査が行われており、それぞれについて概要が報告されている。全ての出典を挙げるべきであるが、紙幅の関係上割愛し、最初の調査のもので代表させる。

(注6) 中楽山遺跡、納所遺跡の資料については、岡田美幸氏の御配慮により実見することができた。

(注7) 西遠の資料では、中村遺跡の資料を後藤建一氏の御配慮により実見することができた。

(注8) 近江については、触れられなかったが、これらの高杯や口縁部に擬凹線文を施した器台の分布が近江から濃尾平野に限られることは、「欠山式」の本質を濃尾地方と琵琶湖地方の接点における緊密化であるとした石黒氏の見解 [石黒1988] を裏付けている。しかし、本稿でも明らかにように多様な関係が土器に表れており、濃尾地方と琵琶湖地方の関係もその内の一つであると考えたほうがよい。また、「緊密化」の具体的内容を明らかにする必要がある。

なお、この時期の、濃尾と近江北部との関わりについて、濃尾から近江北部への多くの人の移住を想定する考え [古川1991] もある。しかし、その根拠の一つである口縁部非ヨコナデ調整の台付甕は、その故地であるはずの濃尾周辺ではほとんど見当たらない。近江北部と濃尾地域が土器の上でかなり共通性が高いことは注目すべきことであるが、具体的に何が共通し何が相違するのか、特定の器種、形式のみが共通するのか或いは組合わせとして共通するのか更に検討を要する。

(注9) 装飾壺そのものに込められていたであろう意味については [西川1985] を参考にした。

(注10) 壺の属性の中でも、文様を共有するまとまり、形態を共有するまとまり、器面調整を共有するまとまり等が考えられる。それぞれがどんな関係を背景としているかはそれぞれ別々に議論しなければならないが [深澤1986]、本稿のパレス壺については口縁部の形態、文様を重視し、その存否を中心としている。

(注11) パレス壺が、農耕に関わる祭祀に用いられることがあるとするならば、パレス壺を共有することは、その祭祀を共有すると言えるのだろうか、それを示す証拠はない。ここでは、農耕、或いはその収穫物に対する意識を共有すると考えておく。

(注12) S字状口縁台付甕とパレス壺では出現時期が違い、パレス壺はいわゆる山中式期から存在しているため、それが各地域での受容の度合いに影響しているとも考えられる。しかし、口縁部の形態から見て、山中式期に各地域に広がったものがそれぞれ独自に各地域で変化を遂げたのではなく、能田旭期のパレス壺は能田旭期の内に尾張低地部から拡散したものと考えられる。

(注13) 受け口状口縁台付甕は、能田旭期に先立つ瑞穂期に名古屋台地ではすでに採用されており、拡散の時期が違うことが他の甕との分布の相違の要因として考え得る。但し、東三河の欠山遺跡では受け口状口縁台付甕が出現するのは能田旭期（併行）である。

(注14) S字状口縁台付甕の製作技術が伝播する方法も具体的に考える必要があるが、本稿では触れることができなかった。

(注15) もちろん、各地域では尾張低地部から受入れた土器形式、尾張低地部以外から受入れたもの、従来からあったもの、その地で新たに生みだされたものがそれぞれ組合わり、「互いに補いあって生活の要求を満たしていたところの、有機的な複合体」 [横山1985] を構成しているわけであるから、その組合わせを議論することが重要であることは言うまでもない。しかし、本稿では各地における尾張低地部からの土器形式の受入れかたを主に問題としており、その実態として組合わせ（様式）単位で受入れているのではなく、個々の形式を単位として確認できるから、個々の形式を単位として問題とするのである。

S字状口縁台付甕、パレス壺、有稜高杯などの生産、使用における「有機的」な関連を具体的に探ることが今後の課題であることは言うまでもない。